

かごしま農36景



いも焼酎

平成の幕開けとともに焼酎ブームは去り、消費量はダウン。だが、近年増加傾向に転じた。鹿児島県は、平成5年、大災害に見舞われながらも消費量は伸び、全国の半分近くを占め、だんトツだ。

他県の人と飲むと、「鹿児島の人強いんですね」と判を押したようにいわれる。「いやあ、それほどでもないですよ」と、これまた判を押したように答える。答えながら「どうせ、いも焼酎でしょ」といわれているように思う。そう思う心に僻(ひが)みが見え、染みついた貧乏性が情けない。

「農業がおくれているから、いつも貧困に苦しめられる。前進の道は容易に見つかりそうでもない。せつかく努力した作付も、一夜にして暴風の襲来により徒労に帰する。焼酎でも飲まぬでは、百姓を続け得ない。焼酎の過多摂取により頭が悪くなる。いい知恵が出ない。だから、農業の・・・」と『鹿児島農業の構造』は昭和20年代の知覧町をレポート。農業の後進性と生活の貧困、そして過度の飲酒の三者はリンクし、循環していると。そのため、県民所得が全国最低であるにもかかわらず、飲酒の程度は日本一だとも述べる。どうもこの延長線上にあるようだ。

わたしの仕事は農業土木。ほ場整備やダムの築造、農道の改修などを受持つ。昭和40年代半ば県庁に入った。その頃、自分達で現地を調査・測量して設計を行った。設計は残業に続く残業で行われた。初年兵の仕事は、図面のコピーや計算の確認などのお手伝い兼見習い。むしろ残業後のオデン屋における“爛(かん)つけ”という焼酎とお湯の調合など、飲ん方の段取りが重きをなしていた。残業が続くと「飲まずにはおられない」といった雰囲気が自然と生まれていた。

しかし、近頃は測量・設計を自分達で行うよりもコンサルタントへ外注するほか、パソコンも普及するなど、仕事のやり方も合理的に。そして人々の生活に対する考え方もスマートになり「飲まずには・・・」といった雰囲気は過去のものになった。

かつて「飲まずには・・・」といわれた知覧町の農業も、今や隣の顛娃町との産地化で甘しょ「紅さつま」が鹿児島ブランドの指定を受けるなど着実に発展している。このため、貧困の自棄(やけ)や仕事の憂さの付き合いであった焼酎は、生活の喜びや仕事の充実感から飲まれるようになったと思う。それでこそ、焼酎は「百薬の長」に。百薬の中には心に対する薬効もある。誇りをもって飲めるという。

(1995年5月)

◇「かごしま農36景 / 発行:鹿児島県農業農村整備情報センター」より

文:門松経久

写真:鶴田 政春「からいも王国」第3回かごしまフォト農美展